

1920年代「狂乱の時代」の登場人物たち

間瀬幸江

Mase Yukie 宮城学院女子大学教授

第6回

生きることは踊ること ——ジョゼフィン・ベーカーという理想

「生きることは踊ること。死ぬときは、踊って踊って、踊り疲れて果てたい」生前そう語ったジョゼフィン・ベーカー(1906-1975)は、2021年、没後半世紀を経てパンテオン(フランス共和国精神の象徴としての偉人の霊廟)に迎えられた。有色人種の女性としては史上初である。

両大戦期にはミュージック・ホールのスターとして活躍し、占領下のフランスではド・ゴール將軍の呼びかけに応え、ナチスに抗するレジスタンス活動を行った。戦後は世界の孤児を養子に迎え「虹の部族」を作り、その大家族の「母」になった。また、キング牧師の「私には夢がある」のスピーチの際に登壇するなど、一貫して自由・博愛・平等の理想を追求した。

腰に十数本のバナナのベルトを巻き、褐色の肉体をあらわにして舞台上に立った「黒いヴィーナス」が、デカルトやユゴーと並ぶ「偉人」として讃えられる日が来るなど、1920年代の観客は想像もしなかっただろう。ただ、陽気にエロスを謳い踊るこのダンサーが、どれほど苛酷な人生を背負っていたのかもまた、彼らは思い至っていなかっただろう。

ミズーリ州セントルイスに生まれたジョゼフィンは、奴隷の娘を母に持ち、父を知らずに育った。異母弟妹との暮らしは貧しく、7歳で働きに出され、13歳で結婚。差別と暴力、そして冷たさばかりの幼年期に、自分の体に見出したのが、踊ることだった。寒い夜も、うずくまらずステップを踏んで体を温め、叱られたときには、おどけて踊って返した。

やがてダンサーとして頭角を現した彼女は、パリで踊るチャンスを手にする。1925年10月2日、シャンゼリゼ劇場で「ニグロ・ショー」に出演。西イ

ンド諸島出身の男性ダンサーと披露した「野生の踊り」では、裸に近い男女の身体が寄り添い、絡み合う。表現が醸す生命力に観客は息を呑んだ。

当時のパリでは、残留した黒人兵士たちが持ち込んだジャズ文化を通じ、黒人文化への関心は高まっていた。だが、熱狂が「黒人らしさ」を消費する表層的な好奇心にとどまっていたなら、彼女がヨーロッパを代表するスターとして躍進することはなかったかもしれない。彼女の踊りには、演出を超えた生命への直感的な信頼と自由が宿っていた。近代社会が抑圧してきたエロスを、人間性の本質として肯定するダンスだった。

ナチス占領下のフランスで、彼女が迷わずレジスタンスに加わったのは、恩義からどころではない。差別と暴力に耐えたアメリカでの幼少期を経て、踊りを愛し、歌を愛する1人の人間としての自分を肯定したフランスを守ることは、彼女にとって当然の選択だった。

まっすぐに理想へと手を伸ばし、しなやかに踊るように生きたこの表現者が、「虹の部族」の子どもたちと過ごしたフランス南西部のドルドーニュ県にあるミランド城は、現在は博物館として公開されている。

彼女の名がパンテオンに刻まれるにあたり、人種差別や子どもの権利などをめぐる諸問題が「すでに克服されたもの」として語られなくなる危うさなど、いくつかの批判も聞こえる。実は私も、ベイカーのまっすぐさ、明るさの理由をつかみ切れず、どこかもどかしく感じながら本稿を書いた。称賛の陰に沈みがちな問いが、今後も語り継がれていくことを願う。それこそが、ジョゼフィン・ベーカーという理想に、私たちが今日寄り添う道筋であろうと思う。

Joséphine Baker (1931)
Jean Chassaing



大修館書店『英語教育』9月号掲載
転載禁止



本文の参考文献は
QRコード参照